

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River



カ

ワニは玉名地方ではホウジャと言った方が分かりやすいと思います。日本ではどこでも普通に見られる淡水産の巻貝です。軟体動物門カワニナ科カワニナ属、チリメンカワニナ、タケノコカワニナなどいますが、熊本県にいるのはチリメンカワニナです。北海道、本州、四国、九州、朝鮮、台湾に分布します。タケノコカワニナは汽水域（海水と淡水が混合したところ）を好み、本県では緑川、菊池川河口付近に多く見られます。雌雄同体で卵胎生ですので、親から子が生まれた時には、子は既に貝殻を身に付けています。

数日の間隔をおいて何回かで100個以上生みます。卵胎生のため多量の石灰質を必要とするので、石灰岩の多い地域を好んで集まるようです。稚貝の大きさは1〜2ミリです。

殻高は3〜4センチ、殻径は1〜1.5センチ、殻は円錐形で殻頂は普通摩滅（すりへらす）して白くなっています。しかし現在大型はほとんど見なくなりました。殻の色は黄褐色〜黒褐色、殻質は硬くて割れにくく蓋は卵型です。普通水のきれいな河川、用水路、

湖沼に生息していますが、最近のようには農業や生活排水の合成洗剤の中の毒性のある水が流れ込んでいる所には生息していません。水温が30℃以上にならず、水中酸素量が多く、流れが緩やかで（流速2m/秒）、個体が流されにくいので、増水時は隠れ場所があるような所であれば生存できます。

山深いきれいな水の谷間に蛭はたくさんいる感じがしますが、そんなきれいな谷間には蛭はいません。何故かという蛭の幼虫の餌であるホウジャが奥深い谷間にはないからです。ホウジャは人間臭い人里の、人間の食べるような野菜や果物の屑などを好んで集まっているようです。

蛭の幼虫の餌がカワニナであるというのを学校で習った子供達が校庭の池にカワニナを飼いはじめたのは最近になってからです。餌は何を与えているか知りませんが、野菜や果物など人間の食べ残しのようなものが一番良いのです。谷川から流れ出たきれいな水のほとりに人家ができてホウジャが繁殖し、蛭が飛び交うという風景は、田舎には現在もまだ残っています。昔から水と人間生活とホウジャと蛭は密接な

関係の中で共存してきたものと考えられます。

私は子供のころ、親父と良くウナギ釣りに行きました。穴釣りですが、たいていは2〜3匹は釣って帰ったのですが、1匹も釣れないときは「今日はだめだったな」と息ついて、流れの穏やかな浅い川の中に座り込んで、周辺にばらまかれたように散在している大きなホウジャを拾って帰ったものです。真夏の日に照らされて焼けた体をきれいな流れで冷やしながら夕日に照らされてホウジャを拾う姿は、今思うと大変懐かしく思い出されます。

捕ったホウジャは良く洗って味噌汁にして食べます。何よりもおいしい味噌汁ができます。中身はカラチの棘（とげ）のようなもので引張り出してちゅつと吸えば簡単に出てきます。昔は糖尿病の薬として使われていたようです。菊池川流域では食用とする話はあまり聞きませんが、福岡県の大牟田市では最近まで食べていたという情報があります。秋田県羽後町では、煎じて飲むと血糖値が下がるということで薬として飲んでいたのでした。

歴史調査の楽しみ方 志口永城跡

15

大田 幸博

(元・菊水町史編纂委員会副委員長)

今

年度は、7月8日に梅雨が明けました。昨年度は、23日でしたから、2週間も早いことになりました。早くも、調査日の11日は酷暑となり、現場は、蒸し風呂状態になりました。

測量中であつた小段④は、帯状に北側へ延びて、長さ28m、最大幅6mの規模になりました。南東縁からは、崩落谷が下り、この箇所を境に、丘陵斜面の傾斜角度が大きくなります。地形の変化点が崩れたようです。

小段④の直下斜面には、三つの小段（足がかり的な極小段）を挟んで、細帯状の小段(30)があります。長さ20m、最大幅2.6m、小段④との高低差は、7.3m。

小段(31)は、その北上に造成された幅広の小段で、長さ36.5m、最大幅7.5m、小段(30)との高低差3.7m、北側へ延びています。

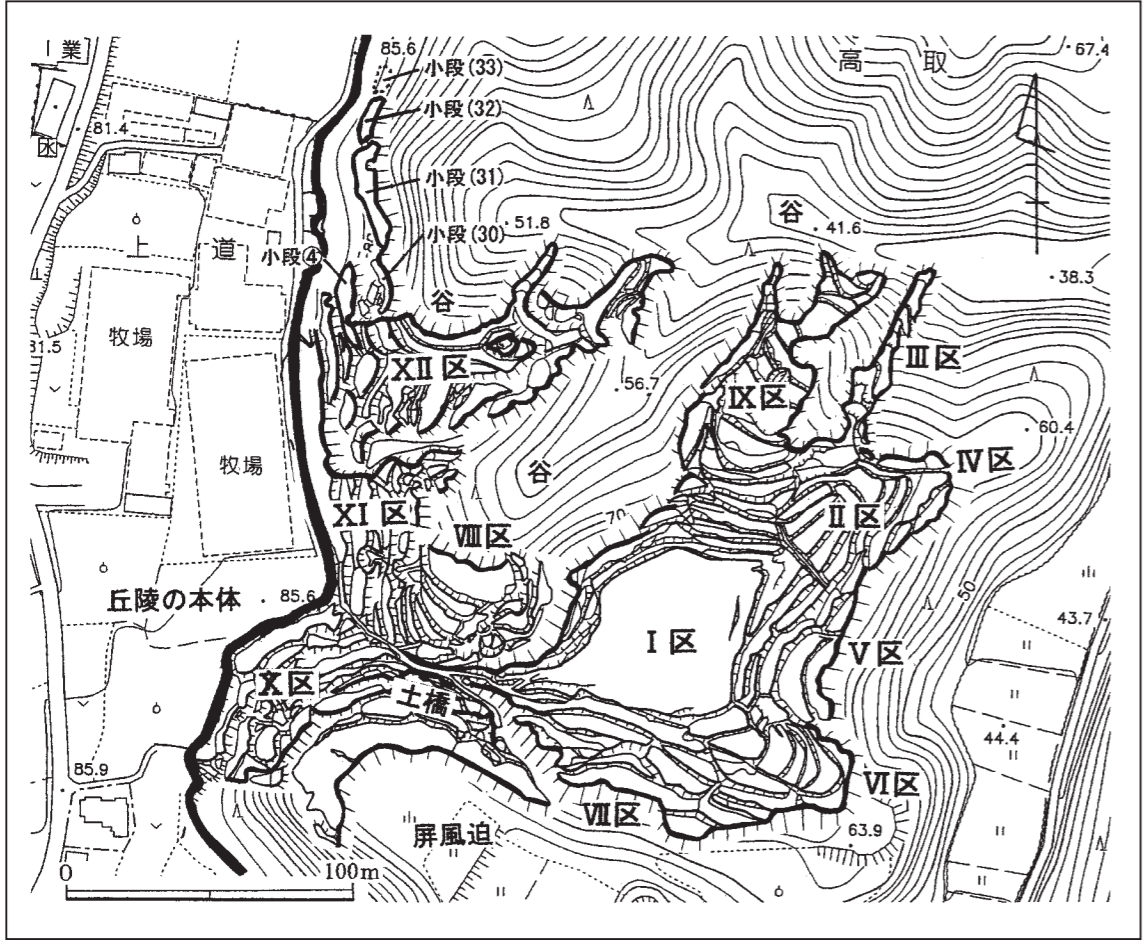
小段(32)は、さらに、上段面に造成

された区画で、長さ19m、最大幅4.5m、主軸の向きは、北東側に振れて、小段(31)との高低差1.5m。

小段(33)は、小段(32)のやや下位に造成されています（未測量）。城域としての丘陵斜面の造成は、ここまでと分かりました。地形的な繋がりから、小段(30)〜(33)は、連的なもので、袋小路になっていることが分かりました。東縁下が、高さ20mを越える絶壁で、縁を立てば、足がすくみます。

先月号でも説明しましたが、このXII区は、志口永城の入口（土橋）をガードした重要区域です。土橋の突破を目論んだ敵方を、この区域に追い込んで、叩けます。逆に、敵方の目に触れることなく、密かに、兵士を城内へ送り込むことができました。

志口永城跡を理解するためには、XII区から歩を進めるのも一方法です。



志口永城跡 全体遺構図